

産ませてもらうお産から産むお産へ

助産師 小林康乃

いつだったか「開業助産婦のお産は何もないところからのお産だからいいのよ」と言った友人の言葉にとても共感したことがあります。

たしかに、何もない家庭分娩の時代から現代の医療に管理されたお産へと産む環境は激変しましたが、何時の時代であっても産む女性が主体であることは明らかです。

以前ご主人の猛反対を押し切ってお産した方が「助産院は医療設備が無い、医師もいないしもし何かあったらどうするんだ、とんでもないよ！」と反対されたそうです。

多くの方がこうした考えで医療施設を選んでいるのでしょうか、中には友人の言ったように「何もない助産院だからこそ安心なのよ」と言う女性たちもいます。

実際、お産の現場でもほとんどの女性たちは医療の手を借りることなく自らの力で産んでいます。中には異常かと思うほど長びくお産もありますが、それは必然性があっての自然に仕組まれた結果であり、むしろ待つことによりいい結果が得られることの方が多いのです。

私の母は、開業助産師でしたが、その母がある日「たまには異常分娩を取り上げてみたいね」と言ったことがあります。

大変不謹慎な言葉ですが、自然のリズムに即したお産はそのくらい異常になる割合が少ないのです。

いま、帝王切開率が15～30%などと言われていますが母とのお産では0.3%ぐらいしかなかったのです。

この差は一体何なのだろうと考えてしまいます。産む人が産み方の一つとしてそれを望むのか、又施設側で待つお産が出来なくなったのか、その辺は分かりませんが、かつては当たり前のように家庭で行なわれていたお産がいつの間にか「お産は怖いもの、何が起こるか分からないから」という視点でしか捉えられなくなったことは事実です。

今、何かと問題になっている「出産難民」という言葉もこうした心理の一つを現しているようです。

このような不安は女性たちの主体的に産もうとする意欲を、そぎ落としてしまいます。

出産という貴重な体験をどう迎えるかは、その後の父性や母性の確立に関わってきます。親の育児放棄、子供への虐待などの問題の根底には、自分で生むのではなく、産ませてもらうことがあたりまえになった女性たちの姿が見えてくるようです。

そうした思いは時として、医療者側への責任の所在を問うことにもなりかねません。

産ませてもらうお産から、産むお産へと視点を移すだけで一人一人のいいお産の姿が見えて来ます。こうした女性たちの産む性の自立は、医師の産科医離れという現象にも歯止めをかけてくれるような気がします。

お産は医療ではなく、一人の女性が母となるための、かけがえのない人間的な営みであることを、忘れてはならないと思います。

先進国でありながら、オランダでは今でも35%の女性が、家庭分娩をしています、そして世界で一番異常の少ない国と言われています。

「何もないところからのいいお産」が、こうしたところからも見えてきます。

助産所のお産は、家庭分娩の延長だと思っています。

大半の方が家族に見守られながら、母親になって行きます。

そこには、もしもの時の医療は最低限のものしか与えられておりません。

だからこそ、自然の生む力を信じ新しい命の力を信じた、いいお産が出来るだと思っております。中嶋所産院には、そうしたお産に臨んだ女性たちの思いが記されたノートがあります。その中から、少しずつ紹介して行きたいと考えています。

4年前のこと...「お母さん、これからはインターネットの時代よ、お母さんさえ文章を書いてくれたら、私がホームページを作ってあげる」と言って開設してくれた、このホームページは娘の突然の死によって長い間工事中のままでした。

今こうして、娘の思いにこたえることが出来たことを、嬉しく思っております。

そしてこのホームページの完成を待ち望んで下さったMさん、やっと約束を果たすことが出来ました、ありがとう。